

# 御陵道改修工事に就て謹記す

齋藤徳之助

奈良縣に於ては紀元二千六百年奉祝會の委囑を受け、縣下御歴代帝陵の參道の改修竝に新設工事を昭和十四年六月以來施行し來り、本年七月全部工事の竣成を告げることが出來た。これは申す迄もなく紀元二千六百年記念事業として行はれたものであつて、曠古の事業として、縣下官民一同恐懼感激申上げて居る次第である。

畏くも 神武天皇御東征の大業を統へ終らせ給ひしより、橿原の宮に皇國の強き固き基を樹てさせ給ひ、爾來平安寛都に至るまで、凡そ五十代、一千四百餘年の間は、都を殆んど大和の地にばかり御定めになられたので、大和は常に政教、文明の中心地であつた。従つて、御歴代天皇の御陵のほどは、概ねこの地に決定せられたのである。

奈良縣下に於ける、天皇御陵は、其の數三十を數へ申上げるこ

とが出来るのであるが、其の内此のたび、御陵參道工事を嚴修せられたのは、二十七御陵の道路である。即ち神武天皇<sup>カムヤマト</sup>、敏達天皇<sup>ニギハヤヒ</sup>、山陵<sup>ヤマノミヤ</sup>、綏靖天皇<sup>スヰセイ</sup>、桃花鳥丘上山陵<sup>トウカトリノウケノミヤ</sup>、及開化天皇<sup>カウキヤ</sup>、春日率川<sup>カスガハ</sup>、坂上陵<sup>サカノミヤ</sup>に至る道路は、現在既に改修された國道又は別の途で改修されたので、此の三御陵道の工事は、この度は除外せられたのである。

茲に御陵道改修工事と申上げるのは、勿論道路法上の道路としての改修であつて、宮内省管理に屬する分に付ては別に其の筋で考慮せられたので、此處に記述すべき筋合ではないのである。

東亞共榮圈の確立、高度國防國家の建設を目ざして、時變下國民は一億一心となり、八紘一宇の精神に則り、皇室崇拜の熱熾烈なるものあり、御歴代天皇の御盛徳を欽慕し奉るため、輒近御陵參拜者は著しく増加して來た。縣内三十皇陵に對する參拜人員は、昭和十五年中に調査した所に依れば、總人員一千四十四萬七千餘人に達し、一日平均實に、二萬八千六百餘人を數ふることが出來

る。蓋し宏大無邊なる御神徳を欽仰し奉り、國民の忠誠を誓ふ所  
を如實に物語るものである。

## 二

御陵道改修工事の總延長は約十八杆、道路幅員は大體四・五米  
であるが、後醍醐天皇塔尾陵の參道は、地形、風致等の關係か  
ら已むを得ず三・六米とせられた。路面は總て砂利道であり、改  
修工事施行時には何れも、市道又は町村道として改修されたので、  
幅員は府縣道としては、稍々狭少であるが、屈曲、勾配、取付等  
は可及的府縣道に準ずる規格に適合する様に施工せられたのであ  
る。而して、之等工事に要した經費は總額三十萬四千圓である。

昭和十四年六月此の榮譽ある工事に着手して以來、關係係員一  
同極めて嚴肅の氣持を以て之に當り銳意工事の進捗を圖つたので  
本年四月には殆ど完成を見るに至つたのであるが、前記後醍醐天  
皇塔尾陵の參道のみは場所が、天下に名高き吉野山に位するため、  
史蹟名勝保存關係の措置に付ての交渉やら、工事が難工事であつ  
た等の關係から本年七月に至つて竣功したのである。其の工事中  
には延長約二十米の隧道が、吉野山櫻中千木の上に開鑿せられ、  
櫻の名勝に一異彩を加へた。多分隧道の名稱は、「吉野山隧道」と  
冠せられることと思ふ。

之等御陵道改修工事には、縣下各種團體は勿論、之のみならず、  
他府縣の有志團體等からも、振つて勤勞奉仕に参加せられ、其の

奉仕人員實に六萬五千人に達したのである。是れは偏に、御歴代  
天皇の御盛徳の然らしむる所で、感激の極みである。

今回改修された御陵道は、何れも内務省の認可を得て、府縣道  
として路線の認定をせられたのであるが、御陵所在地を道路法第  
十一條に所謂樞要地として採擇せられ、而も斯くも多くの御陵道  
を一齊に認定せられたのは、他縣に例を見ざる所であり、御聖徳  
の尊嚴さに、自ら頭が垂れ、併して内務省當局の御理解ある御裁  
斷に感謝申上ぐる次第である。而して、紀元二千六百年奉祝會から  
は、斯くも多額の費用を投ぜられ且つ關係官民各位の熱誠なる御  
盡力に依り竣功を見た。この御陵道は縣當局としては永く立派に  
維持を續けねばならぬ義務がある。折角赤誠を捧げて建設しても、  
其の後の維持が充分でなく、路面内に糞を生ぜしめたり、路面の  
凹凸や路肩の決潰を其の儘放置して置いたのでは、當初の幾萬の  
赤誠が無駄になるばかりでなく、畏くも、皇室に對し奉り、誠に  
恐れ多いこととなるので、縣當局としては、其の維持に萬全を期  
する次第ではあるが、同時に地元としても、此の意義ある事業を  
永く記念し、些かたりとも、不都合や批難のなきやうにする爲め、  
去る七月七日支那事變四週年記念日に際り、一齊に各御陵道の奉  
仕團を結成し、縣の事業に協力せらるゝこととなつた。此の奉仕  
團結成に付ては、特に内閣紀元二千六百年祝典事務局長閣下より  
獎勵と感謝の言葉もあつたやうな次第である。

以下各御陵及其の參道工事其の他の概要に就て一々謹述することとする。

三

本稿は御陵道改修工事に就ての記事であるが、御陵道の建設は一に御陵參拜者に便益ならしむる爲であるので、御陵道工事の概要と併せて、御陵の概要、沿革等に就ても、謹んで記述することとする。記述の順序は、御歴代順に依る。尙御陵沿革等に就ては陵墓概要、聖蹟圖志、御陵裏語表誌等を参考とせしむることを附記する。

安寧天皇畝傍山西南御陰井上陵 御歴代 第三代  
所在 高市郡畝傍町大字吉田字西山 御陵形 山形



(近附橋谷動不) 圖功竣事工道參陵尾塔皇天嗣醍俊

沿革 御在位 三十八年、庚寅の歲十二月六日崩御、御年六十六、懿德天皇元年八月一日現陵に葬り奉る元治元年八月修補、明年二月竣成明治四十年十月及大正十年六月鳥居改造せらる。

懿德天皇畝傍山 南織沙溪 上陵 御歴代 第四代

所在 高市郡歌傍町大字池尻字カシ 御陵形 山形

沿革 御在位三十四年、甲子の歳九月八日(太陽曆十月一日)

崩御、御年七十七、明年十月十九日現陵に葬り奉る。諸陵荒

廢の時、仍陵迹の在するあり、其の形圓、里俗稱して丸山と

云ふ。元治元年修補す。現陵之なり。明治三十五年一月御拜

所前擴張、明治四十三年十二月鳥居改造、大正十一年九月御

拜所前擴張せらる。

右二御陵參道改修工事 延長一二一九米 幅員四米五工費二、

七八三圓、昭和十六年五月竣功

孝昭天皇ツネノミコ上博多山トクノヤマ上陵ノミヤ 御歴代 第五代

所在 南葛城郡大正村大字三室字博多山 御陵形 山形

沿革 御在位八十三年、戊午の歳八月五日(太陽曆八月三十一

日)崩御、御年百十四 孝安天皇三十八年八月十四日現陵に

葬り奉る。元治元年修補せらる。

御陵道工事 延長 一二〇米四 幅員四米五

工費三、二五九圓 昭和十五年三月竣功 勤勞奉仕人員五、

〇三一八

孝安天皇ツネノミコ玉手丘タマテノケ上陵ノミヤ 御歴代 第六代

所在 南葛城郡掖上村大字玉手字富山 御陵形 圓丘

沿革 御在位百二年、庚午の歳正月九日(太陽曆二月二十三日)

崩御、御年百三十七、九月十三日現陵に葬り奉る。元治元年

十月修理明年二月功成る。大正十年十月參拜道改修並御拜所

前擴張、駒寄新設、見張所新設、昭和二年七月周圍木柵を石

柵に改修せらる。

御陵道工事 延長五三五米 幅員四米五 工費一一、二一六圓

昭和十五年十一月竣功 勤勞奉仕人員五、〇〇九人

孝靈天皇カタタリノミコ片丘馬坂カタタリノミヤ陵ノミヤ 御歴代 第七代

所在 北葛城郡王寺町大字王寺 御陵形 山形

沿革 御在位七十六年、丙戌の歳二月八日(太陽曆三月二十三

日)崩御、御年二十八、孝元天皇六年九月六日現陵に葬り奉

る。文久中此の處を考定して片丘馬坂陵となし、元治元年修

治す、明治三十二年、同四十四年及大正三年十二月御拜所廣

場、左右周圍道、鳥居並周圍木柵修補せらる。傳説によれば

御陵附近を稱して、馬の背と云ふ、故一名馬の背の御陵とも

云ふ小さき御塚ありて、古來孝靈塚と曰ひ傳へ此御塚の草木

を持ち歸れば腹痛を起し、牛馬に與ふれば斃死すと。

御陵道工事 延長六六〇米 幅員四米五 工費七、二八六圓

昭和十五年三月竣功 勤勞奉仕人員五、九五九人

孝元天皇劍池嶋上陵 御歷代 第八代

所在 高市郡畝傍町大字石川字劍池ノ上 御陵形 前方後圓

沿革 御在位五十七年、癸未の歲九月二日(太陽曆十月十一日)

崩御、御年百十六、開化天皇五年二月六日現陵に葬り奉る。

元治元年八月修補に着手翌年十二月功成る、大正十年御拜所

改造石柵施設せらる。

御陵道工事 延長五三二米 幅員四米五 工費八、五六七圓

昭和十六年四月竣功

沿革 御在位九十九年、庚申年七月十四日(太陽曆八月六日)

珠城宮(奈良縣磯城郡纏向村)に崩御、御年百三十九、同年

十二月十日現陵に葬り奉る。文久三年十月修理翌四年三月竣

功、明治三十年三月御拜所石柵鐵扉改造、大正十年十二月濠

堤石垣一部築造、大正十四年十一月並翌十五年濠堤石垣一部

築造せらる。

御陵道工事 延長三七七米 幅員四米五 工費六、三二四圓

昭和十五年七月竣功 勤勞奉仕人員九六六人

崇神天皇山邊道勾岡上陵 御歷代 第十代

所在 磯城郡柳本町大字柳本字アンドウ

御陵形 前方後圓三壇築造

沿革 御在位六十八年、辛卯歲十二月五日(太陽曆翌年一月七

日)崩御、御年百十九、明年十月十一日現陵に葬り奉る。一

時陵甚だ荒圯す。元治元年十月修治、翌年二月功成る。

御陵道工事 延長四九七米 幅員四米五 工費四、〇三三圓

昭和十四年十一月竣功 勤勞奉仕人員三、四六〇人

垂仁天皇菅原伏見東陵 御歷代 第十一代

所在 奈良市尼ヶ辻町西池

御陵形 前方後圓、四周濠、陪家七

景行天皇山邊道上陵 御歷代 第十二代

所在 磯城郡柳本町大字澁谷字向山

御陵形 前方後圓、周圍濠

沿革 御在位六十年、辛未の歲十一月七日(太陽曆十二月二十

三日)高穴穗宮(近江國)に崩御、御年百四十三成務天皇二

年十一月十日現陵に葬り奉る。元治元年修補、翌年二月功成

る、大正十三年十二月西北土堤改造、大正十四年十二月御濠浚

濬、大正十五年十一月排水溝改造、昭和三年五月見張所擴張

御陵道工事 延長四七〇米五 幅員四米 工費一〇、〇七二圓

昭和十五年十一月竣功勤勞奉仕人員四六五人

成務天皇狹城盾列池後陵 御歷代 第十三代

所寄 生駒郡平城村大字山陵字御陵前

御陵形 前方御園 三壇築造 三面濠

沿革 御在位六十年、庚午の歲六月十一日(太陽曆七月二十九日)崩御、御年百七、明年九月六日現陵に葬り奉る。文久三年十一月修補明年三月功成る、文久四年二月燈籠建設明治十二年三月石柵及鐵扉改造せらる。

昭和十五年八月竣工 勤勞奉仕人員八一〇人

御陵道工事 延長一七〇米 幅員四米五 工費五、五五三圓

安康天皇 菅原伏見西陵

御歷代 第二十代

所在 生駒郡伏見村大字寶來字古城 御陵形 山形

沿革 御在位三年、丙申の歲八月九日(太陽曆九月二十五日)

崩御、御年五十六、後三年現陵に葬り奉る。後世久しく所在を失ふ、文久三年十一月考定修補翌四年三月竣工、明治三十四年六月御塚内部の凹所埋立修理、大正四年七月御拜所石柵鐵扉改造、昭和三年五月御拜所前廣場一部擴張せらる。

御陵道工事 延長四六五米五 幅員四米五 工費五、三三三圓

昭和十五年五月竣工 勤勞奉仕人員三、八八〇人

顯宗天皇 傍丘磐坏丘南陵

御歷代 第二十三代

所在 北葛城郡下田村大字北今市字的場 御陵形 前方後園

沿革 御在位三年、丁卯の歲四月二十五日(太陽曆六月三日)

崩御、御年三十八、明年十月三日現陵に葬り奉る。大和志、

夙に記して曰く、「昔在今市村寶永年間陵崩、遂爲民居」と、指摘する所今の所在なり。一説に陵西村大字領家に在る古墳二見山を以て、南陵となすも、明治二十二年六月考定して今の所を御陵となし、修理を加ふ、現陵是れなり。明治三十六年御拜所木柵を石柵に改造せらる。

武烈天皇 傍丘磐坏丘北陵

御歷代 第二十五代

所在 北葛城郡志都美村大字今泉字ダイゴ

御陵形 山形(陵前凹字形空壇あり)

沿革 御在位八年、丙戌の歲十二月八日(太陽曆翌年一月九日)

崩御、御年十八、繼體天皇二年十月三日現陵に葬り奉る。此の御陵亦南陵と共に久しく所在を失ひ、一時或は現陵を距る北五町餘平野村落の東北、岩北を以て擬するあり、然るに明治二十二年六月現陵を以て考定せられ、二十五年修補起工明年三月功成る、同年陵道修繕、明治三十七年五月御拜所石柵建設せらる。

御陵道工事(上掲南御陵道合併施行)

延長三、〇二四米 幅員四米 工費三四、〇五三圓 昭和十六年四月竣工 勤勞奉仕人員三、六四〇人

御歷代 第二十三代

所在 北葛城郡下田村大字北今市字的場 御陵形 前方後園

宣化天皇ウツキカミノミコ身狹桃花鳥坂上陵 御歴代 第二十八代

所在 高市郡歌傍町大字鳥屋字見三才

御陵形 前方後圓 四周濠

沿革 御在位四年、巳未の歲二月十日(太陽曆三月十七日)崩

御、御年七十三、十一月十七日現陵に葬り奉る。元祿檢討の

時陵形儼然たり、然し周濠毀はれ東側特に廣く周七町餘の方

池となす、蓋し寛永中、灌漑の爲に外堤を壊ちて作りたるも

の、元治元年新に兆域を劃し修理を加ふ明年三月功成る、昭

和二年四月鳥居改造同年十一月御塚裾一部石垣築造せらる。

御陵道工事 延長一四五米 幅員四米五 工費二、八三九圓

昭和十六年四月竣功

欽明天皇ウツキノミコ隈阪合陵 御歴代 第二十九代

所在 高市郡阪合村大字平田字ウメヤマ

御陵形 前方後圓三壇築造

沿革 御在位三十二年、辛卯の歲四月十五日(太陽曆五月十六

日)崩御、御年六十三、九月現陵に葬り奉る。一時河内國古

市郡輕墓に葬り奉りしを此の地に改葬せらる、推古天皇二十

八年砂礫を以て陵上を葺き奉る。

御陵道工事 延長二七二米五 幅員四米五 工費八、四三五圓

昭和十六年四月竣功 勤勞奉仕人員二五〇人

崇峻天皇タカシホノミコ倉梯岡上陵 御歴代 第三十二代

所在 磯城郡多武峯村大字倉梯字金福寺跡

御陵形 圓墳 周圍土手築造要多青の生垣を廻らす

沿革 御在位五年、壬子の歲十一月三日(太陽曆十二月十四日)

崩御、御年七十三、即日現陵に葬り奉る。幕末修陵の際其の

所在猶決する能はざりしも明治二十二年七月十二社神社祠畔

の封土を以て倉梯岡上陵に決定し周圍百四十間五分を劃し大

に修理せらる。

御陵道工事 延長一五一米二 幅員四米五 工費四、七一四

圓 昭和十五年六月竣功 勤勞奉仕三、四七二人

舒明天皇ユツミノミコ押阪内陵 御歴代 第三十四代

所在 磯城郡城島村大字忍坂字段ノ塚

御陵形 上圓下方墳 上圓二壇下方三壇

沿革 御在位十三年、辛丑の歲十月九日(太陽曆十一月二十日)

崩御、御年四十九、明年十二月二十一日滑谷崗に葬り、翌癸

卯の歲九月六日改めて現陵に葬り奉る。元治元年九月修補翌

年十一月功成る。

御陵道工事 延長二二〇米五 幅員四米五 工費一〇、一一七

圓 昭和十六年三月竣功 勤勞奉仕人員一、三五五人

齊明天皇オホノカハノミコササキ越智岡上陵 御歴代 第三十七代

所在 高市郡越智岡村大字車木字ケンノウ 御陵形 圓墳

沿革 御在位七年（但皇極天皇としての在位は三年）、辛酉の歲

七月二十四日（太陽曆八月二十七日）崩御、御年六十八、後

七年丁卯歲二月二十七日現陵に葬り奉る。孝德天皇皇后間人

皇女と建王とを耐葬し奉る即ち二陵一墓となす、文武天皇三

月十二月修補、天平十四年五月修緝、元治元年十月修補、大

正七年八月木柵改造昭和三年七月參拜道石階改造せらる。

御陵道工事 延長一七三米 幅員四米五 工費四、〇〇〇圓

昭和十五年十一月竣功 勤勞奉仕人員三七五人

天武天皇ヒノクニノミコササキ大内陵 御歴代 四十代

持統天皇トシツクミノミコ檜隈大内陵 御歴代 四十一代

（御陵は御合葬し奉らる）

所在 高市郡高市村大字野口字王墓 御陵形 圓墳

沿革 天武天皇御在位十四年、朱鳥元年九月九日（太陽曆十月

四日）崩御、御年六十五、持統天皇二年十一月十一日現陵に

葬り奉る。

持統天皇御在位十一年、大寶二年崩御、御年五十八、三年

十二月大内陵に御合葬し奉らる。現陵は元治元年修治せら

る。

御陵道工事 延長五七八米二 幅員四米五 工費六、七三一圓

昭和十五年三月竣功 勤勞奉仕人員二、九七三人

文武天皇ヒノクニノミコササキ檜隈安古岡上陵 御歴代 第四十二代

所在 高市郡阪合村大字栗原字塚穴 御陵形 圓丘

沿革 御在位十一年、慶雲四年六月十五日（太陽曆七月二十二

日）崩御、御年二十五、十一月二十日現陵に葬り奉る。元治

元年六月考定修理翌二年二月竣功せらる。

御陵道工事 延長九八六米 幅員四米五 工費七、〇〇〇圓

昭和十六年四月竣功

元明天皇オホヤマトヒメノミコササキ奈良保山東陵 御歴代 第四十三代

所在 奈良市奈良阪町字養老ヶ峰 御陵形 山形

沿革 御在位九年、養老五年十二月七日（太陽曆翌年一月二日）

崩御、御年六十一、十三日現陵に葬り奉る。文久三年十月修

陵、大正五年十一月鳥居制札屋形改造大正九年十二月木柵を

石柵に改造せらる。

一説に法華寺の北、宇和那邊を以て擬すも前方後圓にして周

濠あり遙かに古代の制なるを以て探らず、陵墓參考地たり。

元正天皇オホヤマトヒメノミコササキ奈良保山西陵 御歴代 第四十四代



所在 奈良市奈良阪町字辨財天 御陵形 圓丘

沿革 御在位九年、天平二十年四月二十一日(太陽曆五月二十日)崩御、御年六十九、二十八日佐保山陵に火葬し奉り後二年、天平勝寶二年十月十八日改めて現陵に葬り奉る。文久三年十月修補明年二月功成る、大正五年十一月鳥居、制札屋形改造、駒寄新設、大正九年木柵を石柵に改造せらる。  
一説に宇和那邊の西小那邊を以て擬すも、宇和那邊と同様陵墓參考地たり。

御陵道工事(上掲東陵の道路と合せて施行)

延長二、六〇二米八 幅員四米及四米五 工費二二、一五三

圓 昭和十五年十二月竣功 勤勞奉仕二二、六九二八

聖武天皇ウツヒノミコノミコノミコ佐保山南陵

御歴代 第四十五代

所在 奈良市大字法蓮字北畑 御陵形 圓丘

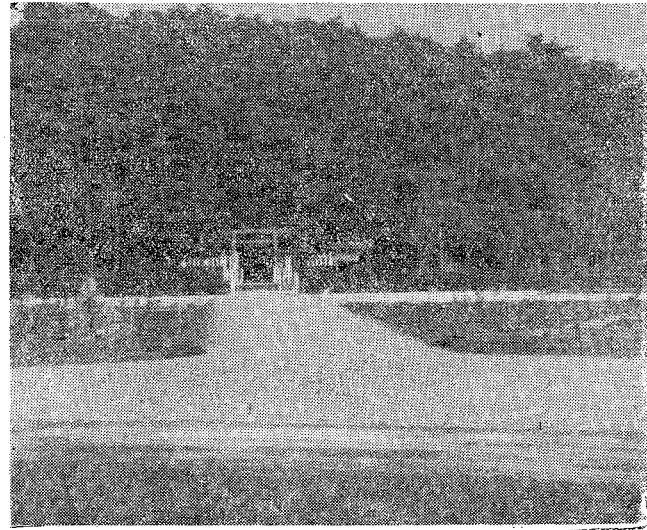
沿革 御在位二十六年、天平勝寶元年五月二日(太陽曆六月七日)崩御、御年五十六、二十日現陵に葬り奉る。嘗て陵下に眉間寺なる寺ありて御陵の奉祀をなす、永祿年中松永久秀此所に築城す、多門山城と曰ふ、文久三年十一月修補翌年三月功成る、大正十一年石柵新設せらる。

御陵道工事 延長一五米 車寄兼待避所の施設 工費四、五〇

○圓 昭和十六年二月竣功

稱徳天皇タカノノミコノミコ高野陵 御歴代 第四十八代

所在 生駒郡平城村大字山陵字御陵前



御陵形 前方後圓 三壇築造前後二丘 四周濠

沿革 御在位六年、寶龜元年八月四日(太陽曆九月一日)崩御

稱徳天皇高野陵及參道工事竣功圖

御年五十三、十七日現陵に葬り奉る。文久三年十一月修補翌年四月功成る、文久四年二月燈籠建設、明治二十二年十二月石柵鐵扉改造せらる。

御陵道工事 延長四七米 幅員四米五 工費八四〇圓 昭和十五年三月竣功 勤勞奉仕人員八一〇人

光仁天皇ミチノノミコノミカド田原東陵 御歴代 第四十九代

所在 添上郡田原村大字日笠字ヲ、ノツカ

御陵形 圓墳 四周空濠

沿革 御在位十一年、天應元年十二月二十三日（太陽曆翌年一月十五日）崩御、御年七十三、延暦元年正月七日廣岡山陵に葬り奉りしを同五年十月二十八日改めて現陵に葬り奉る。幕末修陵に際し藤堂氏山陵奉行に申請し、藩司に命じて修治せしむ元治二年功成る。

御陵道工事 延長三一九七米 幅員四米五 工費一五、〇二六圓 昭和十六年一月竣功 勤勞奉仕人員三三七七人

平城天皇ヤマトノミカド楊梅陵 御歴代 第五十一代

所在 奈良市佐紀町字ニジ山 御陵形 圓墳三壇築造

沿革 御在位三年、天長元年七月七日（太陽曆八月七日）楊梅宮に崩御、御年五十一、十二日現陵に葬り奉る。文久三年十

一月修治せらる。文久四年二月燈籠建設、明治二十四年十月木柵を石柵に改造鐵扉新設、明治三十五年周圍土垣新設せらる。

御陵道工事 延長八七米五 幅員四米五 工費一、九一九圓 昭和十五年八月竣功

後醍醐天皇ミチノノミコノミカド尾陵 御歴代 第九十六代

所在 吉野郡吉野町大字吉野山字塔ノ尾 御陵形 北面の圓丘

沿革 延元四年八月十六日（太陽曆九月二十七日）吉野行宮に崩御、御年五十二、天皇崩御に臨み給ひ、皇太子に遺命して曰く、朕身を南山に瘞むと雖も神は常に北闕を望む若し命を墮す者あらば子は繼體に匪ず臣は盡忠に飛くと言訖りて左に法華經を把り右に劍を按じて登遐したまふ、群臣遺命を奉じて服御を改めず棺槨を厚くし御座を端して如意輪寺の後山塔尾に圓丘を築きて北面に歛め奉る。此の御陵古來儼然として未だ嘗て荒祀に就かず諸陵荒廢の時猶陵守ありて奉祀を絶たず陵下如意輪寺亦歲祀を奉ず、元祿檢討以前已に石柵、鳥居、石燈あり皆僧某の造進する所と曰ふ、元治元年九月修補の工を起し慶應元年正月成る、明治十八年六月御拜所石柵石階改造、明治二十五年石階改造、大正二年駒寄改造、大正三年御

所在周圍木柵を石柵に改造、大正六年鳥居改造せらる。

御陵道工事、延長一、六六五米、幅員三米六乃至四米五 内陸  
道工事、延長二〇米 工費七八、六八四圓

本工事は御陵道工事中最も大なるものにして従つて竣功も昭

和十六年七月となりたり。勤勞奉仕も朝野の知名の士之に從  
事せらる。奉仕人員五、〇〇〇人

## 蘇聯の全貌と抗戦力と交通問題 (上)

### 淡 路 生

第二次世界大戦の方面と性格とを決すべき重要な鍵は獨蘇戦の  
今後展開の如何にあることは絮説するまでもない、この意味から  
蘇聯ロシアが無敵獨軍の猛攻に對して果してどの位堪へ得る力を  
示し得るか、これが世界の最大關心事である、而して蘇聯の抗戦  
力を推測するには勿論各方面の角度から様々に觀察があらうが蘇  
聯の軍事力の樞杆としての工業の現状並に資源と生産力の關係及  
び蘇聯の全般的道路鐵道其他交通運輸機關の状況更に進んで軍需  
工業合理生産の分布状況殊に歐羅巴ロシアを喪失した場合の經濟  
力と抗戦力等々が主たる觀點ではなからうか、而してこの謎の國  
蘇聯邦を觀察するには先づ蘇聯の全貌を見る必要がある。

現在の露國……ソヴェート社會主義聯邦共和國は其領土に於て  
は二百三十五萬平方料と人口一億六千五百萬を有する世界屈指  
の大國である。北は北海白海に接し、西北はバルチック海の一隅  
と歐羅巴最大の湖水ラドガ湖並にオネガ湖を抱いて南は黑海と世  
界最大の湖カスピ海とアラル海を濫へ、遠く極東はオホーツク海  
に面してゐる、陸つゞきは唯西と南のみであつてこれ等の境域の  
内部は地球上最大の廣原に貫かれて居つて、東方シベリアとの境  
には例のウラル山脈が北から南へ走つてゐるが左程峻高でないた  
め交通は極めて平易である、このシベリアには亞細亞第一のバイ  
カル湖がある、又オホーツク海にはカラフト島のあることは吾々は